

裁縫雛形にみる子供服の洋装化の過程

三友 晶子

The Transition Process to Western Style of Children's Clothes
in *Saiho-Hinagata*

Shoko MITOMO

1. はじめに

東京家政大学博物館では平成20年度春の企画展として、「わたしの服・ほくの服－和と洋のはざままで」と題し、明治後期から昭和中頃にかけての子供服を展示した。明治の開国以降、日本人は洋装化という大きな変化を経験するが、特に子供のための服には、着心地のよさや動きやすさが求められることから、機能性に富んだ洋服が積極的に取り入れられた。明治初期において、上流階級の子供が晴れ着や外出着として身につけるに限られていた洋服は、明治30年頃から庶民の間でも着用されるようになる。そして大正・昭和を通じて、子供の洋服は学校制服等の形で、あるいは家庭洋裁の広がりによって徐々に定着していき、戦後の復興期にはほぼ完全に和服にとって代わった。

子供の服というのは消耗が激しく、実際に着用されていた服が良好な状態で保存されていることはまれである。そこで展示に際し、本学の裁縫教育の中で製作された衣服や生活用品等のミニチュアである裁縫雛形が大変参考になった。博物館では明治30年から昭和15年頃までに製作された裁縫雛形を「渡辺学園裁縫雛形コレクション」として多数収蔵しているが、これらは本学の裁縫教育、また近代女子教育の実態を示す資料であるとともに、当時の衣生活をものがたる資料としても貴重である。

本稿では、子供服の裁縫雛形の中でも特に、「子供洋服」等の名称で製作されたワンピース型の洋服について見ていく。子供洋服を取り上げる理由は、学校制服等に比べ形態や着方に規制が少なく、自由度が高いため、デザインの流行や製作方法の改良といった、時代ごとの変化がより明確に表れていることが期待できるためである。子供洋服の裁縫雛形のほとんどが、明治30年から大正8年にかけて製作されたものであるが、これはちょうど子供の洋装導入期とされる時期にあたる。子供洋服の裁縫雛形に見られる変化を通して、日本人が洋服とどのように向き合い、いかにして取り入れていったのかを探る。



写真1 企画展「わたしの服・はく服-和と洋のはざままで」展示風景

2. 裁縫雛形について

子供洋服について見ていく前に、裁縫雛形の概略を述べておきたい。¹⁾

裁縫雛形（以下雛形ともいう）は、本学の前身である和洋裁縫伝習所、東京裁縫女学校、東京女子専門学校²⁾の教育課程の中で製作された、衣服や生活用品などのミニチュアである。

裁縫雛形は、本学の校祖渡邊辰五郎が明治7年に考案した「雛形尺」を使って製作された。雛形尺は、着物の仕立てに使われた鯨尺2尺（20寸）の物差しを、7寸つまり約1/3の長さに縮小し、200の目盛りを刻んだ物差しである。雛形尺の1尺は鯨尺3寸5分（約13.2cm）にあたり、これを反物の並幅とみなして雛形を製作させた。雛形尺を用いれば、縮尺を計算することなく、実物を製作するのと全く同じ方法によって、実寸法の約1/3、大きさにして約1/9の雛形が出来上がるというわけである。雛形尺は、度量衡制度の制定（明治24年）によって私尺の使用が禁止された後も、国の検定を受け一種の縮尺として認められ、大正末期まで教育用として使用された。私尺で公に使用を認められたのは、この雛形尺のみである。ただし、後で詳しく述べるが、雛形製作には全て雛形尺が使われたというわけではなく、明治の洋装ではインチ尺、大正10年のメートル法の採用以降はメートル尺を用いた雛形も見られる。

雛形製作による裁縫教育は、教材費が節約でき、短時間で多種多様な縫い方を習得できることから大変好評であった。また、算術を取り入れた教授法と、小さいながらも実物どおりの服を製作することで、自分一人で寸法を割り出し、布を裁ち、仕立てる力を養い、卒業後すぐに役立つ技術を身につけることができた。

当時のカリキュラムである教授細目によると、大正時代の高等師範科3年間で、雛形、実物、部分縫いを合わせて200点近く製作することになっており、実際に製作した雛形を100点余り当館に寄贈した卒業生もいる。製作された雛形の種類は実に様々で、文化財に指定された資料に限ってもその数は384種にのぼる。和装の長着や袴、洋装のシャツやズボンといった生活に必要な衣服はもとより、弁護士服や手術衣等の職業着、十二単や袴^{かみしも}等の有職類に至るまで製作している。子供用の服飾品の数も多く、和装では一つ身着物、袴、涎掛け等、洋装では学校制服や運動シャツ、下着類、西洋前掛、帽子等がある。

裁縫雛形にみる子供服の洋装化の過程

表1 子供洋服の裁縫雛形

番号	文化財 番号	資料名	墨書名	対象	製作年	製作者	学科	縮尺	着丈	背幅	袖丈
1	2-口-56	子供洋服	-	中人	明治30年	平野よう	-	雛形尺	350	100	205
2	2-口-59	子供洋服	-	子供	明治30年	平野よう	-	雛形尺	210	95	80
3	2-口-87	女兒服	-	子供	明治30年	平野よう	-	縮尺1/2	200	85	150
4	2-口-86	女兒服	-	子供	明治30年	平野よう	-	縮尺1/2	225	85	115
5	2-口-88	女兒服	-	子供	明治30年	平野よう	-	縮尺1/2	240	90	133
6	2-口-89	女兒服	-	子供	明治34年	井上はな	本科	雛形尺	150	90	85
7	2-口-91	女兒服	-	子供	明治34年	井上はな	本科	雛形尺	215	80	140
8	2-口-57	子供洋服	-	中人	明治34年	井上はな	本科	雛形尺	260	100	160
9	2-口-90	女兒服	-	子供	明治34年	井上はな	本科	雛形尺	180	85	90
10	2-口-60	子供洋服	-	子供	明治34年	向井せい	高等科	雛形尺	270	100	133
11	-	子供洋服	-	5.6歳	明治後期	-	-	-	256	68	122
12	2-口-93	女兒服	-	子供	明治38年	斉藤とく	高等科	雛形尺	183	63	33
13	2-口-94	女兒服	-	子供	明治38年	斉藤とく	高等科	雛形尺	205	72	115
14	2-口-92	女兒服	-	子供	明治38年	斉藤とく	高等科	雛形尺	240	88	101
15	2-口-61	子供洋服	-	子供	明治38年	斉藤とく	高等科	雛形尺	250	73	133
16	2-口-63	子供洋服	-	子供	明治38年	斉藤とく	高等科	縮尺1/2	340	160	230
17	2-口-76	女簡單服	嬰兒簡單洋服	嬰兒	明治38年	斉藤とく	高等科	縮尺1/2	215	90	113
18	2-口-77	女簡單服	四才兒簡單服	4歳	明治38年	斉藤とく	高等科	縮尺1/2	290	130	180
19	2-口-74	女簡單服	拾式才女兒簡單服	12歳	明治38年	斉藤とく	高等科	縮尺1/2	390	165	250
20	2-口-75	女簡單服	-	子供	明治38年	乾ミチエ	-	雛形尺	200	65	70
21	2-口-62	子供洋服	幼児服	幼児	明治38年	乾ミチエ	-	縮尺1/2	370	150	210
22	2-口-80	女簡單服	簡單服	子供	明治41年	井上か志	-	縮尺1/2	240	125	130
23	2-口-79	女簡單服	一、二才女兒服	1.2歳	明治41年	伊藤とく	師範科	縮尺1/2	210	120	133
24	2-口-58	子供洋服	簡單服	中人	明治41年	井上か志	-	縮尺1/2	300	123	213
25	2-口-65	簡單服	簡單服	子供	大正2年	鈴木きよ	-	縮尺1/2	260	113	150
26	2-口-64	子供洋服	-	子供	大正2年	鈴木きよ	-	縮尺1/2	323	132	195
27	2-口-66	簡單服	簡單服	子供	大正4年	橋本栄	高師	縮尺1/2	300	100	183
28	2-口-67	簡單服	簡單服	子供	大正4年	橋本栄	高師	縮尺1/2	308	130	154
29	2-口-68	簡單服	-	子供	大正4年	橋本栄	高師	縮尺1/2	303	110	125
30	2-口-70	男簡單服	四五才男兒服	4.5歳	大正7年	高柳やそい	高師	縮尺1/2	260	140	80
31	2-口-81	女簡單服	五六才簡單服	5.6歳	大正7年	高柳やそい	高師	縮尺1/2	255	123	140
32	-	女簡單服	簡單服	子供	大正7年	草川梅	高師	縮尺1/2	270	122	142
33	-	女簡單服	五・六才女兒服	5.6歳	大正7年	高橋キミ	高師	縮尺1/2	255	125	137
34	2-口-69	簡單服	簡單服	子供	大正8年	大塚イシ	高師	縮尺1/2	255	105	177
35	2-口-71	男簡單服	男兒簡單服	子供	大正9年	中村とく	高師	縮尺1/2	264	115	155
36	2-口-72	男簡單服	男兒服	子供	大正9年	松垣静子	高師	縮尺1/2	230	130	155
37	2-口-83	女簡單服	女兒服	子供	大正9年	松垣静子	高師	縮尺1/2	320	130	150
38	2-口-73	男簡單服	-	子供	大正9年	高安ヒサ	高師	縮尺1/2	260	130	155
39	2-口-82	女簡單服	女兒簡單服	子供	大正9年	高安ヒサ	高師	縮尺1/2	315	125	167
40	2-口-85	女兒服	-	中人	昭和3年	城美代子	-	縮尺1/2	435	155	260

*文化財番号:文化財の裁縫雛形には識別番号として「大分類-中分類-番号」が個々の資料に与えられている。

2は「洋装」を、口は「上衣」を表す。文化財以外の雛形については「-」で示す。

*墨書名:製作者によって雛形に直接書き込まれた資料名。

*対象:資料名等から判別し、特に類推出来ない場合は「子供」とした。

*製作年:ノート等から製作年を特定できる場合をのぞき、製作者の卒業年とする。

*学科:「高師」は高等師範科の略

*縮尺:実寸法に対する縮尺を示す。「雛形尺」は実寸法の約1/3。

*着丈、背幅、袖丈:単位はmm

平成12年12月27日に、雛形2290点、附(教具類)^{つけたり}61点が国の重要有形民俗文化財に指定された。近代という時代に限定された指定としては、民俗文化財分野では初めてのことである。その後も卒業生やそのご家族の方からの寄贈がほぼ毎年あり、博物館では平成19年度末までで約4000点の雛形を収蔵している。

3. 子供洋服の裁縫雛形

では、裁縫雛形のうち、ワンピース型をした子供服に焦点を絞って見ていこう。資料名で言う「子供洋服」「女兒服」「簡單服」「男簡單服」「女簡單服」がこれに該当する。裁縫雛形の資料名は、文化財申請にあたって整理・統一されたが、資料名決定の根拠として当時のカリキュラムである教授細目、教科書、製作者によって雛形に直接書かれた墨書の順に、そこでの名称を採用するという方法を取っている。

なお、「子供洋服」という言葉について、本稿では鉤括弧に入れた「子供洋服」は資料名を指し、単に子供洋服という場合は、「女兒服」「簡單服」等を含むワンピース型の子供服全般を指すこととする。子供洋服は、文化財に指定されている裁縫雛形の中に39点ある。このうち下着に近いもの等2点を除き、さらに文化財以外の裁縫雛形3点を加えた、計40点について考察していく。製作年順に、資料名、製作年、製作者、縮尺等の基本情報を表1にまとめた。

以下で、時代ごとの特徴を見ていく。

(1) 明治30年

当館所蔵の裁縫雛形のうち最も古いのは、明治30年に製作されたものである。この中に、早くも「子供洋服」が2点、「女兒服」が3点見られる。一部飾りに緑色のメリンスを使っているほかは、ほぼ全て白い木綿製で、いかにも習作といった趣だが、以後の子供服に多くみられる形が一通り出そろっている。

子供が洋服を着るようになるのは、明治30年代も後半になってからとされている。上流階級の子供たちは舶来品を模して日本人裁縫師が仕立てた洋服を着用し、庶民の子供の間では着物の上にレースやフリルのついた西洋前掛を身に着けることが流行した。出版物に目を向けると、『明治以降 裁縫教育史大要 裁縫関係法令抄』²⁾の中で明治時代における「洋服裁縫に関する一般向けのもの」として挙げられている図書29冊のうち、30年代より前に出版されたのは明治6, 11, 18, 21年の4冊で、他は37年以降の刊行である。このうち子供服を扱った本は5冊あり、松井みさ子著『子供西洋拵^{こしら}へ方』(明治41年刊)等、いずれも明治41年から44年までの間に出版された。このように、子供洋服の製作方法が本格的に紹介されるのは、明治40年代になってからのことである。

このような状況にあって、本学で早くも明治30年に、いくつかのバリエーションをもって子供服を製作させていることは驚きに値する。ただし、当時東京裁縫女学校では教科書として渡邊辰五郎著『裁縫教科書』全三巻(明治30年刊)を用いたはずだが、この中に子供洋服に関する記述は見当たらない。



写真2 資料 [1]



写真3 資料 [2]



写真4 資料 [3]



写真5 資料 [4]



写真6 資料 [5]

表1の [1] (以下、[] 括弧内の数字は表1での番号とする。) (写真2) は、十二歳くらいの女児の洋服である。胸の切り替えとウエストにギャザーが入り、ベルトをつける。衿は、台衿に上衿が付いている。袖は長袖で、肩山にギャザー、袖口は絞っておりカフスが付いている。裾はミシン縫いで、他は手縫いである。このワンピースのデザインは、明治27年頃に婦人用としていち早く洋服が採用された、看護婦服を思わせる。

[2] (写真3) の子供洋服は、スカート^{ひだ}につながるウエストの装飾が印象的である。箱襷が袴を連想させるものの、後ろ腰に付けられた大きなリボン³⁾は、婦人洋服として流行したバスル・スタイル³⁾ になって、後ろのヴォリュームを意識したものに思える。

[3] [4] [5] (写真4,5,6) の女児服はハイウエストのワンピースで、衿や肩、ヨークの辺りにフリルやレースをあしらったデザインは、明治時代のワンピースの特徴である。[3] は裾周りのタックにのみミシンが用いられている。このタックは、装飾と共に、成長に合わせて丈を調整できる実用性を兼ねており、和服の子供ものに見られる「揚げ」と同じ役割をしているといえる。これ以後のワンピースにもしばしば見られる。

(2) 明治34年

明治34年製作の雛形には「子供洋服」2点、「女児服」3点があり、うち2点にプリント柄の生地が用いられている。[10] (写真7) の子供洋服には、他に比して洋服の要素が多く取り込まれて

いる。袖は、外袖と内袖から成る二枚袖で、肘のあたりでカーブし、ギャザーを寄せ、立体的に仕立ててある。また、後身頃を見ると、縦に切り替え線が入っている。これは、体の厚みや曲線にギャザーやシャーリングで対応しているデザインが多い中で、珍しい。[11] (写真8) は [10] とよく似た、明治後期製作とされる製作者不詳の雛形である。スカートの中を見ると、後ろ腰に枕のような腰当が付いており、やはりバussル・スタイルを意識しているといえる。



写真7 資料 [10]



写真8 資料 [11]

(3) 明治 38 年

明治 38 年は、「子供洋服」3 点、「女兒服」3 点、「女簡単服」4 点で、うち 8 点は同一の製作者による。一人で 8 点もの子供洋服を製作したというのは、教授細目で課せられた以上の数である。

裁縫雛形全体を見渡しても、明治 38 年は洋服裁縫の指導内容が飛躍的に向上したように見受けられる。これは、辰五郎の良き協力者であった長男滋が、明治 33 年にアメリカへ渡って一年間裁縫学校で学び、その後ヨーロッパの裁縫教育の状況等を視察したことが大いに関係しているだろう。明治 35 年に帰国した滋は、すぐに「新式洋服裁縫」の教授を開始し、翌年から 3 年間、毎年夏に一カ月間洋裁科講習を行っていた。先に述べた、8 点が同一製作者によるというのは、通常の課程以外のこうした講習での製作物も含まれていると推測できる。明治 38 年に使用されていた教科書は、依然子供洋服が載っていない『裁縫教科書』だが、教科書以外での教授方法の開発、改善、蓄積が相当あったと思われる。

[17] [18] [19] (写真 9,10,11) は、ローマ字で製作者の氏名が記された、年齢別の「女簡単服」である。簡単服については後で述べるが、この名称が用いられるのは明治 38 年が最初である。3



写真9 資料 [17]



写真10 資料 [18]



写真11 資料 [19]



写真12 資料 [13]



写真13 資料 [15]

点とも、色・柄・デザインがよく考えられた、「どこが“簡単”服なのか?」と思うような一見手の込んだ作りをしている。おそらく、切り替え線やダーツを使わずに、身頃のピントックやギャザーによって立体を構成している点等が、洋服としては「簡単」とされるのだろう。

同じ製作者による [13] (写真12) の「女児服」は明治30年の [3] [4] に、[15] (写真13) の「子供洋服」は明治34年の [10] に似ており、手が込んではいるが、袖付けのぎこちなさや直線的・平面的な構成・装飾等から、簡単服と比べるとより和裁に近い方法で製作されたように見える。つまり、明治38年においては、「女児服」や「子供洋服」は、西洋のやり方を見よう見まねで発達させてきたこれまでの洋服裁縫の流れをくんでおり、「簡単服」は、これまでになかった本格的な洋裁を前提として、それを簡単な方法で製作したものであると推測できるのである。

(4) 明治41年

さて、明治38年の裁縫雛形から「女児服」「子供洋服」と「簡単服」の違いについて推測してきたが、明治41年の雛形を見ると、明治時代の子供洋服に関して用いられる「子供洋服」「女児服」「女簡単服」の名称について、それぞれを特徴づけて明確に区別することはほとんど不可能に感じられる。

[22] [23] の「女簡単服」を例にとろう。違う製作者によるこの2点は、教授細目によれば両方とも「女簡単服」だが、[22] には「簡単服」、[23] には「一、二才女児服」という墨書が書き込まれている。形態やデザイン、素材等にほとんど違いがないにもかかわらず、異なる名称で呼ばれていたことがわかる。また [24] の「子供洋服」は、ウエストにベルトのあるデザイン等はこれまでの「子供洋服」を思わせるのだが、墨書は「簡単服」である。

明治41年は『渡邊先生遺稿 新裁縫教科書』全三巻が刊行された年である。この「巻之三」に子供洋服として、「幅二尺長さ四尺五寸の布を以て、一二歳の簡単服の裁方」「幅二尺長さ五尺一寸五分の布を以て、二三歳の簡単服の裁方」「幅四尺七寸五分のセルを以て、三四歳の女児洋服の裁方」「幅二尺長さ六尺五寸のメリンスを以て、四五歳の簡単服の裁方」「幅三尺長さ四尺三寸五分のカシメルを以て、四五歳の女児洋服の裁方」が紹介されている⁴⁾。

ここに「簡単服」「女児洋服」の語が出てくるが、裁ち方図、出来上がり図、縫い方を見る限り、両者の間に特に目立った違いは認められなかった。いずれも、使用単位は尺・寸・分である。まず和裁のように布に寸法を直接標付けをして各部分を直線で裁つ。そして、型紙は使わずに、ヘラで標を付けながら、各部分の形に裁断している。

実際に製作すれば、裁ち方や縫い方の違い、構造上の違いなどが見えてくるのかもしれないが、これまでのところ、明治41年において「簡単服」と「女児洋服」はそれほど厳密に区別されているわけではなかったとすることができるだろう。これは、洋服そのものが上流階級の正装という特別なものだった段階を過ぎてより簡単になったこと、また子供洋服が、大人の服とは違う、子供服特有の形に落ち着いてきたことを意味するのではないだろうか。少なくとも、明治38年まで製作されていた[15]のような、今日のわれわれから見ると洋服としての違和感を覚えるような服は製作されなくなり、教科書にも記載は見られない。これに対し、子供洋服の主流となったのは、衿や袖、ヨークの切り替えや肩のあたりにレースやフリルをふんだんに取り付けた、ハイウエストの装飾的なワンピースである。また、これよりも対象年齢はやや上になるが、ウエスト位置でギャザーを取り、その上からベルトやリボンを締めるワンピースも多くみられる。

(5) 大正2、4年

明治後期のワンピースと、大正期に流行したワンピースを比較すると、歴然とした違いが認められる。ウエストの位置は、ハイウエストからローウエストに変化し、フリルやレース、リボンなどの過度な装飾に代わって、布の配色や切り替え方がデザインのポイントになる。概して、大正時代のワンピースは直線的なシルエットで、シンプルなデザインである。

この変化は急激に起きたものではなく、やはり移行期というものも存在する。それは裁縫雛形でいえば、明治時代の洋服の集大成とも言える大正2年製作の2点と、大正時代のデザインの萌芽が見られる大正4年製作の「簡単服」3点である。

大正2年製作の「簡単服」[25]（写真14）および「子供洋服」[26]（写真15）は、『渡邊先生遺



写真14 資料 [25]



写真15 資料 [26]

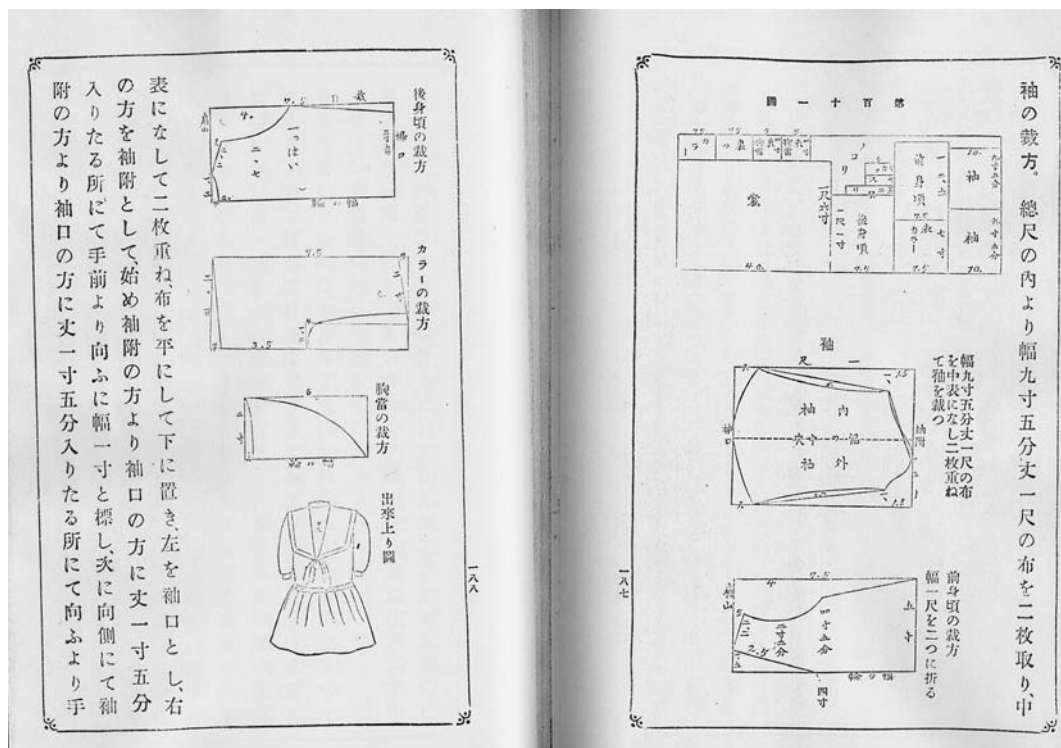


写真16 『渡邊先生遺稿 新裁縫教科書 卷之三』 p.187-188

稿『新裁縫教科書 卷之三』にそれぞれ該当すると思われる製作方法が載っている(写真16)。この2点の雛形は、装飾の仕方などに迷いが見られないというか、形として完成されたものの安定感さえ感じる。明治43年には女兒服に多くのページを割いた『渡邊先生遺稿 渡邊裁縫講義 高等部』が出版され、こうした状況からみても、この時期に明治後期からの流れをくむ子供洋服の製作方法はある程度の確立をみたといえるだろう。

大正4年は「簡単服」3点で、同じ製作者の手によるものである。[27]は、ヨークで切り替え、たっぷりギャザーを取り、裾のピントックなどもこれまでの流れをくんだデザインだが、これに対し[28](写真17)と[29]は、ローウエストという点で目新しさがある。[29]は胸元のピントックや衿と袖口についたレースが前の時代を思わせるが、衿なしの[28]は装飾も白地に白の波形のテープで縁を飾るという具合のシンプルなものである。大正時代に、子供服は子供の純粋さや無邪



写真17 資料[28]

気さを引き立てるようなものであるべきという意見が高まり、このような手はかかっているが控え目な装飾が好まれることとなった。

(6) 大正7、8、9年、昭和3年

大正7年は、「男简单服」2点、「女简单服」3点である。ここで初めて男児の简单服が登場し、それと対応する形で「女简单服」という資料名になっている。ここまで、男児の洋服の上衣といえ、詰襟の学校制服か、やはり学校用の水兵服しかなかったのだが、大正7年にはこのような普段着が製作された。普通この下に半ズボンをはくが、幼児などはズボンなしでワンピース風に着る例もみられる。

[30] (写真18) の男简单服は直線的なシルエットで、袖付け線がなく、見頃と袖が一続きになっている。この時期、縞や格子柄が流行したのだが、コントラストを狙って衿やベルトには白い布を用いるなど、デザイン的によく考えられている。

[31] [32] (写真19) [33] の「女简单服」は、3点ともウエストの位置で切り替え、ベルトを付ける。ピンク色で、フランス刺繍やドロンワークといった、控え目ながらも手の込んだ、効果的な装飾がほどこされている。



写真18 資料 [30]



写真19 資料 [32]



写真20 資料 [35]



写真21 資料 [37]

大正8年は[34]の「女単服」一点のみだが、青のギンガムチェックを使った[30]に似たデザインで、打ち合わせの方向で見分ける以外、男女差がほとんどないことが注目に値する。

大正9年は、[35]（写真20）[36] [38]の「男単服」3点、[37]（写真21）[39]の「女単服」2点である。形や色遣いがすっきりと洗練され、大正時代の子供洋服の特徴をよく示している。

このように、大正7年頃から子供洋服はローウエストの、直線的なシルエットのシンプルなデザインになる。これは、欧米の婦人服の流行がコルセットを用いない直線的なシルエットに変化したことが要因のひとつとして挙げられる。そもそもの洋服のつくりが単純になったことで、洋裁に不慣れな日本人でも比較的容易に取り入れることができるようになった。

大正9年以後の製作で、博物館で収蔵している子供洋服の裁縫雛形は、昭和3年の「女兒服」一点のみである。実際には、子どもの洋装化は大正10年以降加速していき、例えば大正11年には「東京子供服洋服組合」が創設され、また本学においても大正10年に『裁縫全書 児童洋服の部 上巻』⁵⁾が出版され教科書として使用されるなど、子供洋服をめぐる状況はむしろ活発化している。おそらく、大正12年の関東大震災によって本学は学生・教職員が被災し、校舎を失う等の大きな被害に遭うのだが、この混乱の中で授業が立ち行かなくなったり、また製作物の多くが焼失したため、現存していないのではないだろうか。

4. 考察

さて、主に外見上の特徴に注目し、年代ごとに裁縫雛形を見て来たが、次に考察に移りたい。裁縫雛形から読み取れる事柄は数多くあるが、ここでは、以下の三点について分析を試みる。

- ・使用単位と縮尺について
- ・「単服」について
- ・実際の衣生活との関係

これらの問題点は、筆者が裁縫雛形に関わるようになって以来持ち続けている疑問であるが、子供洋服に焦点を絞ることで一層あぶり出されてきたように思われる。また、裁縫雛形を見た来館者から「実物の何分の1なのか」「実際にこのような服を着ていたのか」等の質問受けることがこれまでにあった。以下で、調査前に抱いていた予想等も交えながら、子供の洋装化および裁縫雛形への理解を深めるであろうこれらの問題点について考えていく。

(1) 使用単位と縮尺について

裁縫雛形の縮尺は普通実寸法の約1/3だが、子供洋服の雛形には、実寸法の約1/3のものもあれば、縮尺1/2のものも多くみられる。これはなぜか。

実寸法の約1/3という数字は、そもそも雛形尺が鯨尺の約1/3の縮尺として作られたからであり、実物を製作する際に使われる単位が鯨尺の尺・寸・分ならば、その雛形製作には当然雛形尺が使われ、出来上がった雛形は実寸法の約1/3になるのである。つまり、表1の「縮尺」の項目に記した

ように、「雛形尺」といえば、使用単位は尺・寸・分、縮尺は実寸法の約 1/3 というように、単位と縮尺の両方が分かるのである。これに対し、実物の製作にあたって鯨尺を使わない、インチ尺やメートル尺を使用する洋服およびメートル法適用後の昭和期の雛形については、縮尺寸法の求めやすい実寸法の 1/2 の製作物が多くなる。

今回のように、導入期の洋装について見ていく場合、鯨尺かインチ尺かという違いは、洋服を和裁の要領で仕立てられるように工夫したのか、それとも製作方法ごと受け入れたのかという違いにつながっている。例えば、洋装の雛形について次のような傾向が見られる。

①縮尺 1/2 の雛形：インチ尺による。欧米の洋裁の理論と方法をほぼそのまま取り入れている。雛形では、男性の燕尾服やフロックコート、女性のスカートやジャケットといった正装に多く、子供用としては、学校外套や学校制服がこの方法で製作されている。教授細目によれば、雛形とともに実物大の製図も学んでおり、実際、明治 38 年卒業生の寄贈品に洋服の雛形とそれに対応する実物大の型紙が含まれていた例もある。

②雛形尺（実寸法の約 1/3）の雛形：雛形尺、つまり鯨尺で製作。直線の部分が多く、和裁の知識と技術で仕立てられるように工夫された洋服。子供用では、運動シャツ・ズボン、西洋前掛、下着としても用いられたシャツがこれに該当する。これらは子供洋服よりも需要があり、また西洋前掛やシャツは和服と組み合わせられることが多かったことから、鯨尺での製作が確立されていたと推測できる。

この傾向を踏まえ、子供洋服の裁縫雛形について調査前は以下のような予想を立てていた。

〈予想〉 ①と②に大別したように、洋装の雛形には、洋服の要素がどの程度取り入れられているかという、「洋服度」の違いとでも言えるものが見てとれる。子供洋服の「洋服度」は、①と②の間に位置すると言えるだろう。子供洋服の裁縫雛形に見られる大きさのばらつきは、子供洋服の中でもさらに「洋服度」に幅があることを意味しているのではないか。単純に言えば、縮尺 1/2 つまり大きな雛形はインチ尺使用で洋服の要素が強く、雛形尺による縮尺約 1/3 の小さな雛形は、実物大の製作では鯨尺を使用するわけだから、和服の要素が強い。洋服度の違いは、製作年に対応しているか、あるいは資料名に反映されているのかもしれない。

〈考察〉 教科書の裁ち方図等を参照した結果、予想と食い違う部分があることが判明した。

まず、「縮尺 1/2 の雛形ならばインチ尺で作られている。」について検討すると、例えば、『渡邊先生遺稿 新裁縫教科書』は全ての子供洋服が鯨尺で示されているが、これを教科書に使ったと考えられる明治 41 年から大正 6 年の間に製作された子供洋服の雛形は、すべて縮尺 1/2 なのである。つまり、鯨尺で仕立てる服の雛形を作る場合でも、必ずしも雛形尺を使ったわけではなかった。

「縮尺はある程度指導者に任されていたよう」⁶⁾であることは、裁縫雛形の文化財申請時にすで

に指摘されている。では、鯨尺でありながら、便利な雛形尺を使わないのはなぜか。それは、洋服の製作にとって重要なことは、細部の縫い方やミシンの使い方を覚えることにあったためではないかと考えられる。雛形尺を使うメリットのひとつとして、実物大で製作するときの標準寸法をそのまま頭に叩き込むことができるという点が挙げられる。標準寸法を記憶しているかどうかは、着用者の体型やデザインによる寸法の違いがほとんどない和服の裁縫においては、仕事の速さに関わる重要な問題である。これに対し、洋服の製作にあたっては、各人の体型やデザインによって寸法が異なるため、標準寸法はあるにはあるが、それが頭に入っていればよいという問題でもなかった。それよりも、おそらく慣れない袖付けのカーブを練習したり、タックやシャーリングの効果などを学んだりするには、そもそも小さい子供の服であるし、約1/3よりも1/2の縮尺で製作した方が、学習効果が高かったのではないか。

次に、「実寸法の約1/3ならば、雛形尺を使って製作した、つまり実物は鯨尺による、和服的な洋服なのではないか」という予想を検証していく。雛形尺で製作されたと思われる雛形は明治30、34、38年のもので、これらについては参照できるような教科書等の記述が見当たらないのだが、明治38年にインチ尺で製作された学校制服や学校外套等については型紙が残っていることから、型紙のない子供洋服は鯨尺による製作と考えて間違いないだろう。

ただし、例外的な雛形があって、縮尺1/3と思われるがインチ尺を用いて製作されているのである。それは、当館で収蔵している、和洋裁縫女学校（現 和洋女子大学）で明治38年頃製作されたと思われる雛形である（写真22）。雛形と同時に寄贈された製作ノートを見ると、「二尺の布を以て女兒五才の洋服裁方」とあり、その出来上がり図からこの雛形の製作方法を記したものであるといえるのだが、裁ち方図をみると単位はインチ（吋）を使っており、また「形紙」（型紙）を使用していることが分かる。



写真22 インチ尺による雛形

本学以外の女学校での製作物ということもあり、このことからただちに「縮尺約1/3ならば雛形尺使用」という図式が否定されるわけではない。しかしながら、本学の裁縫雛形と同じような形態

でインチ尺を使用した雛形の存在は、その図式を再考する必要性を示している。

また、インチ尺を1/3に縮尺するのは、ただでさえ慣れない単位を扱うのにそこに面倒な計算がともない、現実的ではないように思われるが、当時のインチ尺定規を見ると何通りもの縮尺が刻まれ比例尺になっているものがある。比例尺は、実物製作にあたってサイズ展開をする際等に必要になるものだが、この目盛りを雛形尺のように使って雛形を製作した可能性も無いとはいいきれない。

子供洋服は、年齢によるサイズの違いや、スカート丈やウエストの位置といったデザインによるプロポーションの違いも様々で、数値からこの雛形は実寸法の1/2、これは1/3と一概に言えないところがある。現状は、他の雛形との比較や、子供の標準寸法との比較から縮尺を導くことがほとんどである。今回、使用単位と縮尺についてかえって様々な可能性が出てきて、解決をみるには至らなかったが、これについては単に寸法だけの問題ではなく、雛形製作を通して何を重点的に学ぶのかという問題を含んでいると認識できた。今後は、雛形の詳細な計測を行い、型紙や裁ち方図といった製作方法を参照するとともに、条件が許せば雛形を解体する等して、検討を重ねていきたい。

(2) 「簡単服」について

「簡単服」という名称は、明治38年製作の雛形の墨書に見られる例が最も早く、明治41年出版の『渡邊先生遺稿 新裁縫教科書 卷之三』や大正元年改定の教授細目等にも記載があることから、本学において日常的に使われる、通りの良い言葉だったろうと考えられる。何の疑問もなく「仕立てるのが簡単、着用も簡単な洋服」というほどの意味で捉えていたが、子供洋服をまとめて見ていくなかで、「簡単服」がそうは簡単に作られていないことが理解でき、その定義が揺るぎ始めた。また、「簡単服」を辞書で引くと「夏に用いる簡単なワンピース仕立ての婦人服。あっぱっぱ。」(広辞苑第六版)とあり、一般的な意味での「簡単服」と、本学の裁縫教育における「簡単服」が、意味を異にするらしいことが認識できる。

〈予想〉 簡単服とは、直線裁ちや直線縫いの部分が多い、つまり和裁の技術で仕立てられるように工夫した洋服である。明治の洋服導入期、洋服を手に入れるには、高価な舶来品か専門の裁縫師が仕立てる注文服しかなかった。それが、簡単服の考案によって、裁縫学校や家庭でも製作できるようになり、洋服の普及を促すこととなった。

〈考察〉 簡単服については、明治38年の雛形でふれたように、この頃本格的に紹介されるようになった洋裁を前提として、それを簡単な方法で製作したものであると推測できる。ただし、この場合の「簡単」は、本格的な洋服からみれば、ということであり、実際にはそう簡単に仕立てられるものではなかっただろう。例えば服を立体的に仕立てる方法として、ダーツや切り替え線を使わないにしても、細かなピントックやギャザーといった洋裁の技術が必要とされている。本当に簡単に作ろうというのなら、体型に関係なく大きめに仕立てたり、袖は身頃とつながっているキモノスリーブにするなど、方法は他にあるはずである。

実際、[30] (写真 18) の 大正 7 年の簡単服は、そのような方法によって製作されたように見受けられる。大正 4 年頃から、洋服そのものの流行が直線的なシルエットに移行し、この雛形も簡単な作りでありながら、それほど不格好ではなく、大正時代のモダンな雰囲気を伝えている。

しかしながら、大正 9 年になると、「簡単服」は再び簡単とは言い難い作りになっている。一見直線的なシルエットながら、洋服らしく袖付けはカーブがついており、カフスやくるみボタンなど細部にまできちんと手が掛けられている。簡単になりかけた「簡単服」が、軌道修正して「やや作りやすい本格的な洋服」という位置に戻ってきたかのようである。

本学の裁縫雛形の簡単服は、当初の予想とは違い、和裁の技術で仕立てられるような簡単な方法を追求することによって洋服の普及を促す、という性格のものではなかった。思えば、三つ揃いの背広や燕尾服、バウンスル・スタイルの婦人服等を仕立てる、いわば「裁縫のエリート」を養成する教育において、簡単服といえどもそのレベルが極端に低くなることは無かったのだろう。

これに対し、大正 11 年刊の子供洋服実習會高木鐸子による『家庭で出来る子供及婦人服 ドレッシング』には、「本書の洋服裁縫は営業的ならずして家庭の主婦方が手軽に仕立てられる事を目的としてお話してあります。随って和服を縫ふ気分で成るべく在来の和服裁縫を利用して頂き度いのでございます。」⁷⁾とあり、鯨尺で寸法を記している。口絵には子供洋服実習會参加者が自分で作った服を着ている写真があり、これによると主婦のみならず小学生までもが洋服の講習に参加していたことがわかる。写真 23 は講習に参加した小学六年生女子で、「私共の学校では、高木先生の考案なされた簡単服を、皆が着る様に成りましたので私共六年生だけ、学校で其縫方を教えて頂いて、自分で着て見ました。」⁸⁾という感想文も載っている。こうした、家庭で出来る簡単な洋服の考案は、生活改善同盟会⁹⁾を始め大正 10 年頃活発に行われた。

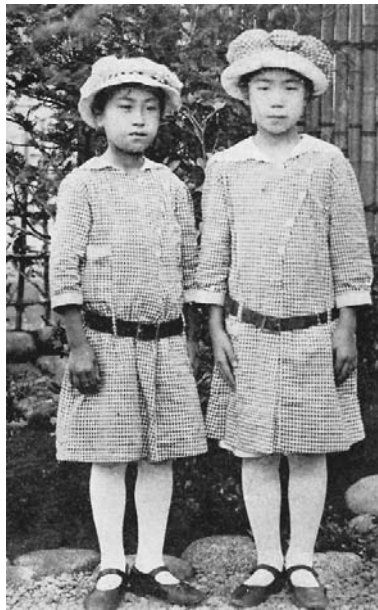


写真 23 子供洋服実習會に参加した生徒
高木鐸子、「家庭で出来る子供及婦人服 ドレッシング」, 子供洋服実習會, 1922, 口絵より引用

ちなみに、「あっぱっぱ」として知られる一般的な意味での「簡単服」は、大正12年の関東大震災後、和服の不便を痛感し、洋服を取り入れる動きが高まる中で、これに目をつけた大阪の既製服業者が安値で売り出した婦人ワンピースである。夏涼しく、浴衣地一反の値段で二枚も買えるあっぱっぱは、洋服を着たことのない庶民の間にも全国的に広まり、女性の洋装化が一気に進んだ。¹⁰⁾ この「簡単服」は、家庭裁縫による洋装化の限界を、既製服が乗り越えたという意味でも注目される。つまり、洋服の普及を推し進めたのは、簡単に作れる「簡単服」ですらなく、簡単に手に入る既製服だったのである。

そもそも庶民の生活における洋装化は、近代社会を迎え、活動的な衣服の必要性が出てきたことが原動力になっている。衣服の機能性については、明治・大正期に多くの議論がなされ、様々な衣服が考案された。それらを大別すると、和服をもとに動きやすい服を考案する動きと、そうした段階を経ずに、機能的な洋服へと移行する動きとがあった。渡邊辰五郎は、和服をより機能的にした「改良服」の考案者として知られており、裁縫雛形にも明治38年から43年までに製作された改良服がある。しかしながら、辰五郎は自身の考え出した改良服にとられることなく、ほぼ同時期に、滋の働きもあって、簡単服を裁縫教育に取り入れているのである。つまり裁縫雛形には、時代の要請に応えようとする、和服と洋服の双方からの動きが見てとれる。本学の裁縫雛形にみられる簡単服は、「普及版」とは言えないにしても、洋服の機能性に早くから注目し、これを日本人の衣生活になじむ程度にまで簡略化し、かつ美的であろうとした点で、考案者の衣服製作に対する深い見識と実績、誇りが感じられる。

(3) 実際の衣生活との関係

裁縫雛形が製作されていた時代、実際はどのような服が着られていたのだろうか。先に触れたが、実際に着用された子供服というのは、傷みが激しく残りにくい。幸い博物館には、明治後期製作とみられるワンピースが3点（写真では2点）、大正11年頃製作の女兒服1点、大正7年製作の男簡単服が1点が残されている（写真24）。雛形とほぼ同じデザインで作られたこれらの実物大資料から、



写真24 実物大の子供洋服 手前左から明治後期のワンピース2点、女兒服、男簡単服

雛形製作の現実的な有効性を推し量ることができる。しかし、これらはすべて授業での製作物である。裁縫雛形に限らず、授業中の製作品や教育用見本として製作された衣服については、「実際に着ていたかどうか」疑問の残るところである。

ここでは、実物資料や既製服に関する資料を挙げている明治・大正期の子供服についての先行研究を参照し、裁縫雛形と当時の衣生活を比較したい。

1) 鳥居本幸代「大正浪漫期の子供ファッションー『土井子供くらし館』所蔵品から (Part8 ワンピース)」より

「土井子供くらし館」は、平成2年12月、三重県尾鷲市朝日町にある土井本家の数ある土蔵から発見された明治中期から昭和初期にいたる子供のくらしを物語る遺品を陳列する資料館としてオープンした。これらの所蔵品はいずれも保存状態が極めて良好で、洋服や帽子類では横浜や東京の輸入商の化粧箱入りのまま保存されているものもある。鳥居本は「土井子供くらし館」の所蔵品を調査し、「大正浪漫期の子供ファッションー『土井子供くらし館』所蔵品から」¹¹⁾という解説を、『繊維製品消費科学』に9回に分けて連載した。その8回目で取り上げられたのが「ワンピース」である。

ここで紹介されているワンピースの写真を見ると、裁縫雛形とほぼ同じデザインであることがわかる。

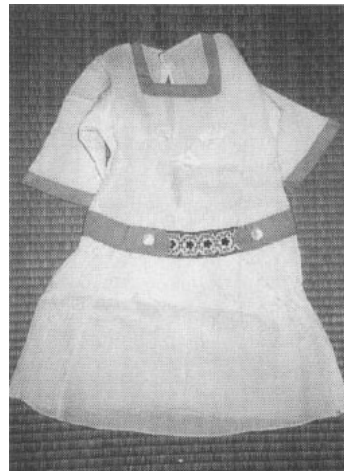


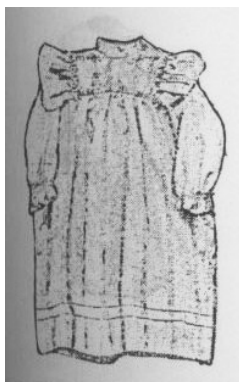
写真 25 鳥居本幸代，“大正浪漫期の子供ファッションー『土井子供くらし館』所蔵品から (Part8 ワンピース)”，『繊維製品消費科学』，vol.40, No.11, 1999, p.20,21 より引用

これらのワンピースは、明治38年生まれの土井家の利子さんが着用したであろう服で、サイズなどから類推すると、明治末年から大正にかけてのものと考えられる。土井家には、写真のようなデザインのものが6点、写真のローウエストのワンピースは4点所蔵されている。

2) 三越の子供既製服

次に、三越の資料室が所蔵する既製子供服に関する明治37年から大正15年までの写真・記録及び雑誌を調査し、子供服の普及過程を考察した、城所綾子「大正時代の子供服についての一考察－既製子供服を通して」¹²⁾を参照しよう。

城所はこの論文の中で、資料の写真から不鮮明なものを除き、そのデザインについて分析・検討を加えている。このうち、女兒ワンピースは、明治時代15点、大正時代46点の計61点にのぼる。



明治38年

写真26



明治44年



大正9年

城所綾子「大正時代の子供服についての一考察－既製子供服を通して」,
山脇学園短期大学紀要, 第22号, 1984, p59, 61より引用

これらのワンピースを概観して、「明治時代にはフリル・ギャザー・刺繍のやわらかい装飾的ワンピースであったが大正時代の始めにはストレートでややローウエストのデザインに移った。ついで大正5年頃から10年頃までは、カラー・カフス・ベルトを身頃と別布でデザインしたものが多くなり、別布のトリミングのものも見られ、太目であったベルトは細くなり、衿なしが多くなった。」¹³⁾とまとめているが、これまで見てきたように、子供洋服の裁縫雛形もこれとほぼ同じ流れをたどったとすることができる。

限られた資料から、しかも土井家のような名家と、三越で服を購入する層とをもって、「当時の衣生活」とするのは早急にすぎるだろう。しかしながら、裁縫雛形とほぼ同じデザインの子供洋服が、実際にある家庭で着られ、百貨店で販売されていた服とほとんど変わらないこと、それどころか、むしろ裁縫雛形に時代を先取りする傾向と、丁寧な仕立てや洗練されたデザインとを認められることは、裁縫教育と流行との関わりといった面でも興味深い。

5. おわりに

子供服の洋装化は、関東大震災や太平洋戦争を契機に活動の必要に迫られて一気に進んだのだが、今回子供服の裁縫雛形を通して、こうした非常事態ではないときに、子供の身体機能や活動性、可愛らしさといった特性に目を向け、よりよい衣服の模索が行われたこと、そして試行錯誤の中で製作・着用両方の面で日本人に合う洋服を作り上げていったことを実感できた。

また、裁縫雛形と実際の衣生活との関連性の強さを確認できたことにより、時が進むにつれて、裁縫雛形が当時の衣生活を示す資料としてますます重要になるであろうことが確信できた。裁縫雛形が含みこんでいる歴史的な情報量は予想以上に多く、今回はその膨大さに圧倒され一端に触れる程度にとどまったが、今後裁縫雛形を歴史資料としてどのように活用していくのか、研究調査はもとより、収集、保存、公開の面からも考えていきたい。

最後になりましたが、裁縫雛形の寄贈者の方々、また、裁縫雛形の文化財申請に尽力された元博物館員の方々に畏敬の念を込めて改めて感謝申し上げます。また、今回の調査や写真撮影にご協力いただき、多大な励ましを与えて下さった博物館員にこの場を借りて御礼申し上げます。

註

- 1) 裁縫雛形については、重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫雛形コレクション 上・下巻，東京，東京家政大学博物館，2001，上巻 179p，下巻 1207p に詳しい。
- 2) 明治以降 裁縫教育史大要 裁縫関係法令抄，東京，財団法人渡邊学園，1940，p56
- 3) バッスル・スタイルは、バッスル（腰当）によってスカートの後ろを張り出して膨らませたシルエットが特徴。明治初頭にはじめて日本にもたらされた婦人の洋装がバッスル・スタイルで、明治10年代後半に鹿鳴館スタイルとして花開いた。
- 4) 渡邊滋（編），渡邊先生遺稿 新裁縫教科書 卷之三，再版，東京，東京裁縫女学校出版部，1908，p.159-205
- 5) 渡邊滋（編），裁縫全書 児童洋服の部 上巻，再版，東京，渡辺女学校出版部，1916，204p
- 6) 重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫雛形コレクション 上巻，東京，東京家政大学博物館，2001，p10
- 7) 高木鐸子，家庭で出来る子供及婦人服 ドレッシング，子供洋服実習會，1922，p1
- 8) 高木鐸子，家庭で出来る子供及婦人服 ドレッシング，子供洋服実習會，1922，p233
- 9) 第一次世界大戦後、物価高騰によって困窮した経済上の問題を解決するため、節約等を掲げた生活改善運動が推し進められた。その中心となった生活改善同盟会は大正9年に結成された半官半民の組織で、各地で「服装改善講習会」を開くなど、服装改善にも大きな役割を果たした。
- 10) 中山千代，市民洋装の形成，服装文化，第165号，1980，p34-35
- 11) 鳥居本幸代，大正浪漫期の子供ファッションー『土井子供くらし館』所蔵品から (Part8 ワンピース)，繊維製品消費科学，vol.40,No.11，1999，p.18-22
- 12) 城所綾子 “大正時代の子供服についての一考察－既製子供服を通して”，山脇学園短期大学紀要，第22号，1984，p57-84
- 13) 城所綾子 “大正時代の子供服についての一考察－既製子供服を通して”，山脇学園短期大学紀要，第22号，1984，p63

参考文献

- 永野泉，『婦人画報』にみる子供服の洋装化の過程，服飾文化学会誌，vol.8，no.1，2007，p75-87
- 夫馬佳代子，衣服改良運動と服装改善運動，東京，家政教育社，2007，151p
- 飯島偉考，明治初期における服装技術史上の和服と洋服裁断技術の接点，風俗，第8巻1号，1968，p1-12
- 装苑アイ No.12 子供服，文化学園ファッション情報センター，1993
- 渡邊滋（編），渡邊先生遺稿 渡邊裁縫講義 高等部，訂正第二版，東京，東京裁縫女学校出版部，1910，518p
- ANNUALY REPORT of WATANABE JO GAKKO, Tokyo, Tokyo Women's College, 1928, 18p